

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号： 1 2 1 0 3  
研究種目： 奨励研究  
研究期間： 2022 ~ 2022  
課題番号： 2 2 H 0 4 1 2 3  
研究課題名 視覚に障害のある児童の地理的知識の実態調査

## 研究代表者

嶋 俊樹 (Shima, Toshiaki)

筑波技術大学・障害者高等教育研究支援センター・助教

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 378,840 円

研究成果の概要： 視覚に障害のある児童の地理的知識の実態を明らかにするため、質問紙に基づく聞き取り調査を行い、教材を開発し試作した。

特別支援学校（視覚障害）に在籍する小学部低学年（1・2年）児童5名に対する調査結果は、住所の正答率は20%、学校の所在地の正答率は0%であり、視覚情報の入手が困難なことによる傾向であるかは不明な点も多い。そのため、晴眼児の地理的知識の実態との比較も必要である。

3Dプリンタで用いて学校の周りの教材として、地形の高さの倍率を4段階で試作した。土地の高低差に着目した教材を、実際の学習活動の中で、どのように活用できるか、高さの倍率や空間の範囲などを含め継続した検討が必要がある。

## 研究成果の学術的意義や社会的意義

地理的知識の習得およびそれらを用いて地理的事象を分析する力をいかに高めていくかは、地理教育における課題の一つである。

視覚に障害のある児童の地理的知識の実態を明らかにすることは、児童の概念形成を促すこととともに教材開発の検討につながる。児童の地理的知識の実態が明らかになる一方で、視覚情報の入手が困難なことによる傾向であるかは不明な点も多いため、晴眼児の実態との比較を含め継続した調査が必要である。また、教材開発については3Dプリンタで試作した教材の高さの倍率や空間の範囲などについて検討を重ねるとともに、実際にそれらを活用した教育活動においても継続して検証する必要がある。

研究分野： 視覚障害児教育

キーワード： 視覚障害 地理的知識 教材開発

## 1. 研究の目的

地理的知識の習得およびそれらを用いて地理的事象を分析する力をいかに高めていくかは、地理教育における課題の一つである。本研究では、視覚に障害のある児童の地理的知識の実態を明らかにするため、質問紙に基づく聞き取り調査を行い、児童の実態および教材開発への検討につなげることを目的とした。

## 2. 研究成果

### (1) 実態調査

特別支援学校（視覚障害）に在籍する幼児児童生徒数は減少傾向にあるが、協力の得られた2校に在籍する小学部低学年（1・2年）児童5名に対し、担任教諭の口頭による聞き取り調査を行った。

質問項目の概要は、次の～の通りである。

自分の住所

自分が通っている学校の所在地

学校を含む地域内で学校の場所を尋ねられた時にどう答えるか

学校を含む都道府県内で学校の場所を尋ねられた時にどう答えるか

都道府県外への旅行時に、旅行先で出発地を答える。

国外への旅行時に、旅行先で出発地を答える。

宇宙への旅行時に、旅行先で出発地を答える。

の正答率は20%で、無回答・不正確な回答もあったが、住所には都道府県、市区町村、大字等の名称が地理的知識として児童が有していることが明らかになった。の正答率は0%であったが、都道府県名や学校名に含まれる地名を部分的に回答する児童もいた。特別支援学校の学校名に都道府県名が含まれることもが多く、児童の地理的知識として習得された可能性がある。小学部低学年において、学校の所在地に関する地理的知識に比べ居住地のまわりに関する地理的知識を習得する傾向が示唆されたが、晴眼児は居住地に位置する小学校に通うことが多いため、同様の調査を実施して比較する必要がある。～については、旅行先に応じて、都道府県名、日本、地球などの答えがみられた一方で、旅行先の場所によらず同じ出発地を答える児童や無回答の児童もみられた。低学年においては、未学習の地理的知識が含まれることもあるため、他学年の児童に対する調査を行う必要がある。

これらの結果からは、視覚情報の入手が困難なことによる傾向であるかは不明な点も多いため、今後、小学校低学年の晴眼児の実態調査を実施し比較することで、視覚に障害のある児童の地理的知識の実態に加え児童の地理的知識の解明につなげることを期待される。

### (2) 教材の試作

視覚に障害のある児童に対する教育活動における教材開発への検討につなげるにあたり、3Dプリンタを用いて学校のまわりの地形の教材を試作した。地形的な特徴のある場所に立地する学校を例に取り上げ、地形の高低差に着目し高さの倍率を変化させた教材を作成した。データについては、国土地理院ホームページよりSTLファイルを手し、高さ方向の倍率を0倍、3.3倍、6.6倍、9.9倍とした。実際に学校のまわりの学習で、どのように活用できるか、高さ倍率、範囲など、既存の教材及び指導方法と関連付けて継続して調査・研究を進めていく必要がある。また、上述の児童の実態から、特別支援学校（視覚障害）小学部3年生の社会科で、学校のまわりを題材として扱う際に、児童が有する地理的知識に応じた指導が必要である。

### (3) 今後の展望

今後の展望として、特別支援学校（視覚障害）に在籍する児童の継続した調査を実施するとともに、晴眼児に対する同様の調査を実施する必要がある。視覚に障害のある児童と晴眼児の地理的知識の実態の比較に基づく新たな学習活動の展開の可能性も期待される。また、3Dプリンタで試作した教材開発として、教材の高さの倍率や空間の範囲などについて検討を重ねるとともに、それらを活用した教育活動においても継続して検証する必要がある。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
----	--------